

Will's Garden: Sto:loh 族社会と男性の役割^{(1)*}

浜由美子**

I はじめに

カナダの女性先住民作家であるLee Maracleによる *Will's Garden* (2002) は、文化的に適切な著作に与えられるJTスチュアート賞 (J T Stewart Award) を得て、書かれた作品である。Maracleは今まで女性の視点から作品⁽²⁾をずっと書き続けてきたが、初めてこの著作で15歳のSto:loh族の少年を主人公とした青少年向けに分類されている作品を著した。同年に発表された *Daughters are Forever*⁽³⁾では、男性に関して次のように言っている。

Daughters are forever. Daughters never leave. Sons are temporary; they belong to future families... Sons are dispensable, but every daughter is needed to recreate the villagers. (22)

娘は家を出て行かないから、永遠に継続していくが、息子は出て行き、家族を持つ。すなわち、娘は村を起こすのに必要だが、息子はだれにでも取って代われると述べている。*Daughters are Forever*では、今までMaracleが扱ってきた様々な先住民としての問題以上に、先住民として作者自身が抱えてきた母と娘の葛藤を解きほぐし、和解へ至る過程を提示している。しかし、先住民社会全体の調和ある未来に向けては、女性の変革だけでは、不十分であり、男性としての役割をきちんと果たしうる健全なる男性像・健全なる家庭像を将来の社会を担う若者たちに示したい、という著者の願いがこの作品に込められていると考える。

また、先住民社会の日常生活の生き生きとした描写、儀式の際の準備の様子などにおいて見られる問題に立ち向かう姿勢を提示し、共同体としての在り方にもMaracleは焦点を当てている。先住民社会に生きる個人としての女性の生き方を模索、考察し続けてきた作者による先住民社会の今後のあり方を示す作品である。

もう一点、今までの作品と大きく異なる点は、主人公であるWillという若者が、過去を透視する能力があることが最初から読み手に明らかにされており、本人もそれをごく自然なこととして受け止めている点である。*Ravensong* (1995)にもこのような能力を持った主人公の妹

* *Will's Garden*: Sto:loh Society and the Men's Role

** Yumiko Hama 十文字学園女子大学短期大学部 英語英文専攻 (English Language and Literature)

キーワード: 母系社会 Sto:loh社会 成人式 共同体 夢

Celiaが出てくるが、その透視イメージは物語の背景としてのみ扱われており、途中からCeliaは姿を消してしまう。*Daughters are Forever*では、現代社会に生きる主人公Marilynは、自分のそのような能力を、異常なこととして素直に受け入れられずに、悩み続ける。このような点からも、この作品の視点、すなわち、Willの視点が、先住民社会と白人優位社会との狭間に生きる、悩める者ではなく、伝統的先住民社会の価値観に最初から立脚していることが明らかである。冒頭に次のように書かれている。

Night opens me up to dreamtime. At night when the moon wrestles with dark fluffy clouds like she's doing now, I feel like I can remember backwards and forwards. I can remember how it feels to bustle about the beach loading a big canoe a century ago. I can remember digging pits, preparing *oolichans*, watching them transform from candlefish to grease; I can almost feel the steady warm from hot rocks as the little fish slowly melt. I can remember crawling up the Coquihalla pass, pack on my back, setting up camp on the hillsides, building shelters and picking blueberries. ... I don't remember when I first started seeing snippets in the skirt of the moon, but it feels like I have been seeing them forever. (5-6)

月と雲が戯れるような晩に、先住民としての‘集合記憶とでもいうようなもの’⁽⁴⁾が、Willに100年以上も前のカヌーでの航海、シシャモ (*oolichans*) から油をとる作業の様子、コキハラ峠での作業の様子などを自らの体験のように感じさせる。Willにとってこのような記憶はいつから始まったかもわからないほどに自然なことである。Willが夢想の中で、対話したり、質問するのに、読み手も自然に引き込まれることになる。従来の作品のように、一章が終わって、あるいは最後になって、状況が読み手に解き明かされる手法とはかなり異なっている。

このような状況設定で、話は、Willの成人式を中心として、Willの学校での問題、公共施設の建設、Willの恋、母親の秘密の発見、Willの急病へと話は展開していき、Willが現代社会における自分の立場、方向性を自覚していく過程が描かれていく。

さて、本稿では、Sto:loh族の社会生活・男性の役割を中心に、作品全体にかかわる背景、および、扱われている問題点を筆者の経験も交えて検討していく。まず、作品全体の背景となるWillの命題、成人式の準備に関して考察してから、項目別にSto:loh社会の特性を検討する。それによりMaracleの意図するところを解き明かしていくこととする。

II Willの命題

まず一章で、Willの夢に、大人を迎えるWillの方向性を暗示させている。Willの夢は、当然のことながら先住民にとって一番大切なワタリガラス (Raven) やワシへと進んでいき、チーム山 (Cheam Mountain) にまつわる伝承話へとつながっていく。

ワタリガラスは、「変化を起こし、雨や洪水をこの世にもたらすもの一月の端をかじり、地球を形成した力の源 (a powerhouse) 一であり、その気になれば、全世界を沈めることもでき、

すべてを司る」(6) 生き物である。そのワタリガラスが「ワシが戻ってくる、でも、その半分は死ぬであろう」(6) という警告をする。「ワシは精神界のものを一同に集めて、一瞬にして、生きとし生けるものに肉体を与えたが、その後の何千年もの苦難の歴史をも与えた。」(7) そのワシの帰還の意味は何かというのが、夢で与えられた、Willの最初の命題である。

夢想は、次に、チーム山で行われた伐採に関する話へとWillを誘う。叔母のJosieが、乱伐による地割れで二つに割れそうになっているチーム山を白人がピンで留めようとしていることを笑話として語り、母や祖母と一緒に笑っている。それを聞いて、Willは、チーム山が割れたらフレーザー谷は消え、至る所で人間や動物が死んでしまうという危機感を抱く。

Pinning it up may not work, but something has to happen. ... This little snippet has defined the direction my journey will take.(9)

ピンでは留められないだろうが、何とかしなければならぬ。それが、今後の自分の進むべき方向性だと、Willは環境科学者 (environmental scientist) になりたいという気持ちを再確認する。そして、この混乱した世の中でSto:loh族の男としての生き方に指標を与え、来週迎える「成人式」(Becoming Man Ceremony) への備えをもしてくれた月に感謝のタバコを捧げる⁽⁵⁾。

作品の後半では、曾祖父がWillの夢に訪れる。

Everything is different, but your insides are the same. Our laws don't change just because the landscape does. Don't make any changes without ceremony. (111)

時代が変わったからといって、我々の本質は変わらない。節目には、必ず儀式が必要だという曾祖父の語りかけを聞いて、Willは、既婚の兄Tonyの話と重ね合わせて、それを次のように解釈する。

Don't change my insides without ceremony. I rethink Tony's story about getting to know the mom, the sisters, the aunts, the girl-cousins, like he belonged to them. The men still belong to the women's family. (111)

儀式なしに変わってはいけない。男は今でも女性の家族に従属しているのだということを痛感して、Willは成人式の儀式に臨むことになる。

Ⅲ Willの成人式への準備

二章では、「成人式」の準備の様子が生き生きと語られている。全編を通して、先住民の日常生活、その苦難の中にある笑いの精神などが臨場感を持ち描かれているが、先住民作家によるこのように前向きな楽しめる作品は少ないと言える。先住民社会と白人社会との対峙・葛藤というより、問題はあるにしても、先住民社会の家族の絆、共同体としての結束の強さなどを前

面に出し、状況を肯定的に捉えている。

筆者は儀式直前のほぼ混乱状態に近い状況で、多くの人を楽しそうに話し合ったり、からかいあったり、大笑いをしながら準備をするのに何度も居合わせた。これで間に合うのかと心配になるほどなのに、なぜか当日になると、だれが指示するわけでもなく、すべてが納まるところに納まる⁽⁶⁾。その模様をMaracleは次のように描いている。

The crunch is on. Getting ready for this Ceremony has reached a crisis, so, naturally we are now able to handle it. We're Natives and we all seem to do well in a crisis. In fact, we never plan anything far enough in advance to prevent it from becoming a crisis. We are flying about, busy, hurrying, short of breath and snapping at each other and laughing by turns. Mom's house is full of women, all five of her sewing machines are roaring. There are colored cloth strips everywhere. ... I don't see any plans for the blankets anywhere. ... They are looking at each other yakking or laughing and grabbing strips of cloth without paying any attention to which strip they choose. Like magic, the blankets take shape. (11)

これはWillの成人式のギヴァウェイ (Give-away)⁽⁷⁾のための準備である。儀式の当事者であるWillの家族が、お祝いに来てくれた人全員にお土産をあげるために、5台もあるミシンを総動員して、楽しく笑いながらキルトブランケットをどんどん作り上げていっているのである。不意の客に備えて、母親はWillにシーツや枕カバーなど300ドル分を、後で買いに行かせるが、いろいろなものを入れた袋を100人分用意する。ただ、贈り物は心のこもった時間をかけた手作りがいいとされる。Willの二人の兄弟はチョーカー、胸飾り (breastplates)、腕飾りなどを作り、従姉のSarahは、髪留め (barrettes)、袋、モカシン (先住民の皮靴) の飾りなどを、Willのケープとお揃いで仕上げている。父親はスプーン、フォーク、サラダ・ボールなどの木彫りをする。食べ物を作る女性もいるし、親戚も含めて、全員で用意する。この準備作業の様子は、筆者が実際に見た通りで、計画も立てずに、いろいろなものができあがっていくのが、物事がなされる様である。先住民は危機に強いというWillの考えに筆者も同感で、これにはいつも驚き、感心している。それをWillは次のように語っている。

We all gather and go into crisis mode at the house of whoever's ceremony it is and work our fingers to the bone for about a week, laugh our heads off, tease the life out of each other and somehow it all falls into place. (96)

儀式前の1週間ほど休むことなく手を動かしながら、死ぬほど笑いこけ、からかい合っているうちに、なぜか全てが納まっていく。アルコール抜き⁽⁸⁾で、こんなに楽しめる人たちは筆者には驚きである。Willの言葉を借りると、次のようになる。

We are about the only humans in the world I know that'll laugh at a punch line without

knowing the set up. (95)

状況がわからなくても、冗談のオチを聞いただけで、笑える世界中で唯一の種族である。「笑いの理由もわからずに笑っていることもある」(28)のだ。

先住民の儀式は、かつて禁止されていたが、最近は会社や学校も理解を示してきて、「公欠 (time off) が認められる」(85) ようになってきている。4年後にWinter Dance⁽⁹⁾があり、それにより真の大人の仲間入りをするが、間もなく執り行われる成人式を境として、Willは自らの人生の方向性に関して決断をしていかななくてはいけない。

Life long decisions about direction, about belief, about attitudes and about conduct. We would have to make them alone, in the dark, in our imagined selves. We are instructed to make decisions freely, carefully, considerately and hold our ground. (66)

さて、ここから、この成人式を軸として、Willがどのように自覚し成長していくかをSto:loh社会の特性を通して考察していく。この作品に主として扱われている6項目を、順に検討しながら、どのような環境でWillが自立していくかを明らかにする。

IV Sto:loh先住民社会の特性

1 母系社会・男の役割

まず、Sto:loh社会の特性の第一に挙げられるのが、母系社会であるということである。ただ、女性作家が描いた作品として、フェミニスト的視点で、男性に母系社会の女性たちをこのように扱ってほしいという願いが作品に表明されていると考える。兄のTonyが妻のRachelとの関係について、Willに次のように語る。

Pop says you got to care a lot about women... You got to like their moms. Get to know them and pray their moms like you. Indian women stick with their moms. Rachel comes with a truckload of girl cousins, aunts, sisters and her mom. (107)

とにかく女性は大事にしなくてはならない。妻のRachelはトラック1台分の従姉、伯母、姉妹、母親とセットになっているから、悪いことをしたらみんなに注意されると言うのだ。このような母系社会において、誰が女族長 (matriarch) になるかは、投票ではなく、叡智を認められることにより自然に決まるのである。

“Women eat anytime. Men eat after their chores are done.” Their chores are defined by what the head women need done. “The head woman is always someone’s mother.” She is not elected, nor is she self appointed. She seems to be recognized by her siblings and the men around her the way my mom is recognized and it seems to have something

to do with her knowledge. (45)

男のする雑用も女族長が決める。知らないことがあるときには他の人に手綱を渡す柔軟性も含んでいる。

No votes, no election, no platform, just simple acknowledgement. ... No man in the history of this family has betrayed the heart of its women. That is not democratic, its Clan. ... The whole Clan moves as a unit, and the feelings of its women are the center of its unit. Us kids are all spokes in the family wheel, the women stand at the hub and the men wrap themselves around those spokes to make sure the wheel turns around free and easy. (46-7)

Willの家系の男たちは、女性を欺いたことがないのを誇りとしている。投票もせずに、族長の権威を認めるというのは民主的ではないが、それが部族 (clan) というものであり、部族は一つの単位として機能する。子供は家族の輪の軸棒で、女性はその中心で、男性は輪がスムーズに楽に回るように周りを囲い守るのがその役割である。Willは成人式の準備を手伝いに来たLee-Laniに心ひかれるが、「彼女とのことがうまくいなくても、家族が支えてくれる」(118)のを信じている。女族長の下、何があっても、結束して動く社会なのである。

2 共同体のプロジェクト

現在、村には託児所、高校、高齢者センターを併設した複合施設を建てる計画がある。材料はほぼ整ったが、建設費はないし、専門家もないところで、全員で作業することになった。ハンマーやのこぎりを使える男は朝1時間、仕事が終わってから1時間無償で仕事をする。仕事のないものは終日奉仕する。その間家のローンだけは政府が肩代わりしてくれる。

Willは建築に関してだれも何も知らない状況でどうしてこんなプロジェクトが可能であろうかとみんなの樂觀振りを愚かだとさえ思う。

We are undertaking the construction of a major complex without any papered carpenters, electricians, and plumbers and with only vague notions of landscaping, drainage and blueprint reading. This is so wrong. (145)

さらに、こういうことを始めるにあたり、集会在招集されるわけでもなく、いつ始めるということも分からずに、なんとなく物事が始まる先住民のやり方にも危惧の念を抱いている。

No one is calling this meeting to order or letting anyone know when things will get started. I have some angst about this part of the way we all are. (141)

そんな中で、女たちも何をすべきかを見極めるために建設現場へ行く。居留地 (Rez) では

女性も、大工仕事でも何でもする。建設現場では、子供も石を積んだ手押し車を押すのを手伝う。祖父のように働けないものはドラムと歌で皆を鼓舞する。大工仕事が生来好きではない Will はシャベルで掘るなど馬鹿らしいと思うが、自分たちがしないと、女たちがすることになるので、しかたなくする。村の半分以上が手伝いに来ているが、作業の様子は、Will には「哀れ」(pathetic) としか映らない。

また、「白人は建設現場を建設現場とかいうが、インディアンは用地が託児所になるとなったら、建物がなくとも託児所と呼ぶ」(151) というのも情けないことだと Will には思える。100年も経ったのに、曾祖父の時代の道路建設現場と同じ手作業で、なんら変わっていない。それでも、母親は穴が掘れたぐらいのことで感激している。

このように無益な作業をしているように思える中で、Will は二つのことを学ぶ。一つは、叔母の Josie が野菜と対話しながら楽しそうに料理していたことである。「すべき仕事がつまらなくても、人生なんてそんなものよ。...だから、自分で仕事を面白くするわけよ。それができなければ幸せにはなれないわ」(Most of life is (idiot's work.) ...You don't learn to story up the mundane, and love that, you can never be happy. 151-2)

もう一つは、学校の友人の Joseph の目から見た視点の認識による。Joseph の父親は建築家で、仕事が終わってから建設作業を無償で手伝ってくれることになった。毎日のように Joseph も作業現場を訪れた。

“Take some pride in doing something no white community could possible do. ...with no money, you are building a very fine complex.” ... Joseph is truly feeling proud of himself for the first time in his life. It had never occurred to me that there could be a white man that did not enjoy the privilege of domination. (166)

先住民社会が、白人社会では起こり得ないことを、資金もなく成し遂げようとしていることへの Joseph の驚嘆を通して、Will は共同体の力を痛感させられる。

I had been looking at the downside of this world for so long that even when there was an upside I never saw it. ...it is seeing the upside that keeps us moving in the direction of the good life. ... Joseph and me will be friends forever. (166)

社会の悪い面ばかり見てきたので、いいことがあっても気がつかなかったこと、人生を良い方向へ持っていくには、良い面をみることだと悟る。そして、「Sto:loh 族の第 1 の美德は、勤勉」(The major virtue of the Sto:loh nation has become hard work. 167) ののだと自らを奮い立たせる。

3 差別・偏見

この作品では、曾祖父の時代の採掘所や学校での差別、ホモへの差別、クリー族や黒人への差別や偏見が取り上げられている。しかし、本稿では先住民に対する差別に焦点を合わせる。

祖父母がロッキーの道路建設工事に従事していたころは、「インディアンも中国人も銀行にお金を預けられなかった」(50) という劣等民族としての制度上の差別もあれば、命綱も付けずに働かせられたり女性をレイプの対象とされるなどの被抑圧民族としての差別があった。

...we are children in the eyes of the law. We are big enough to work, but not grown up enough in the eyes of your law to be men. (50)

仕事はさせるが、法律上大人とは認めないということだった。

Willの学校で受ける差別や偏見は、教員やフットボール選手 (jocks) からのものである。

I can't handle those white boys who take everything way too seriously. Or maybe it is me who takes them too seriously. ... Every chance the jocks get, they say something crude about 'Indians' and I have no idea how many times the physical education instructor has said, "You're not on the reservation boy, push," or the jocks have asked me about getting my wick dipped. When I hear Tony telling me not to take them seriously, I hear "put up with it" in my mind. (37-8)

自分が気にしすぎるのが悪いのかとも思うが、兄のTonyから、気にするなと言われると、我慢しろと言っているように聞こえる。同じ学校に通う成績優秀学生 (an honor student) であるSarahは次のように助言する。

Don't believe them. Racists are thoughtless is all. They don't think. They don't treat each other well. They rag on their buddies for losing a game, being late, and not being where they are supposed to be... They have the emotional maturity of a tantrum throwing wounded wolf pup, would be downright unfair to treat them seriously. They say ugly things, but that just makes it easier to ignore them. Make friends with the ones they don't want. The noisy ones are generally in the minority. (38) ... Nerds are thoughtful. (40)

「差別主義者は何も考えていない、仲間さえちゃんと扱わないのだから、そんな人を本気にするのが間違っている。思慮深いオタク (nerds) と友達になる」ようにと言うSarahの助言に従って、Willはオタクグループと一緒に食事をすることにした。そして、10年ほどの学校生活で初めて白人学生とつながりが持て、帰属感を抱けた (this new sense of finally belonging 43)。ところが、その学生の一人Witがゲイだとわかり、家族が受け入れてくれるかどうかでWillは悩むことになる。差別される側が差別する者にもなるということである。

I have found a friend from the other side of the river. My friend is a gay. A huge number of my people are Catholics, or Catholic schooled that makes them pretty narrow

minded about gayness (homosexuality). ... My folks are not the kind of people that go about gay bashing. ...but there is a long hallway between gay bashing and acceptance. Being your friend could definitely be a liability. If someone were to challenge my friendship with you, I would have to hold my ground. It's a Sto:lo thing. (65-6)

特に家族にはカトリックが多いので、ゲイには抵抗がある。ゲイ叩きはしないにしても、受け入れるのは難しいだろうとWillは考える。ただ、この友情に文句を言うものがあれば、Sto:loh 族の男として、Witを擁護して自分の立場は守るとWillがWitに言うと、Witは「君の文化はそれ(友を守ることを要求するが、僕の文化ではその必要はない) (Your culture demands it, mine does not. 66) と答える。しかし、WitがこのようにSto:loh族の特性が理解できたのは、Witにもインディアンが流れていたからだと後でわかる。

WitやJosephのような友達ができただけ、Willはいじめの元凶フットボール選手たちに一人に対抗し、結局は自分の側に付かざるをえないように頭脳戦で持っていく。

「首長」(Chief) とか「燻製」(Smoked Meat) とか呼ばれ、練習中にもわざと手荒なタックルをされ、敵よりも味方に怪我させられることが多いWillが、いじめの親分Jackが退部にならないようにコーチに頼んだ。Jackがその理由を尋ねる。Willは、「(いじめが) 見つかって、退部なんてことになったら、親父さんにこっぴどく叩かれるだろう (84)」と言う。また、次のようにも言う。

I just want to live. Be let to live. Be let to be. I don't want to hurt anyone or make any waves. I just want the right to be. (84)

「自分の生活がしたいだけなのだから、ほっておいてほしい。誰も傷つけたくはないのだ。生きる権利がほしいだけだ。」このようにして、WillはSarahに言われたとおりに、「慈悲深い勝者」(a gracious winner) となった。

It (Slandering) does not mean anything to him. ...but if you treat him right, you will mean something, then maybe you can challenge his language. (85)

「こっちが悪口を言ったって相手は何とも思っていないのだ。でも、正しく相手を遇せば、その時自分の言葉はなんらかの意味を相手に対して持つようになり、相手の悪口にも対抗できる。」とSarahは言う。

Willはチームの主将Jackに自分は「将軍」(general) だけれど、Jackは「軍曹」(sergeant) だと言う。Jackはどうやったって試合に勝てないが戦い方を知っている自分は勝てる。友達になれば、一番強いチームのキャプテンにしてやると言って、毎回試合の前に、呼吸法などを指導する。そのおかげで、Jackのプレーは見違えるように良くなる。さらに、皆の前でJackに話させた後、自ら決意表明をする。

I have been mistreated by almost everyone in this room from grade school up. I will be sixteen tomorrow. Today is the last day I put up with any abuse. I just want to get along, enjoy my friends and get through three more years... Today they don't like me any better, but they will respect me. (138)

「小学校からずっと受けてきたいじめをもうただ我慢はしない。仲良く残りの学生生活を送りたい」と宣言することにより、Willは16歳になるのを機にいじめと決別した。いじめっ子たちが自分のことを好きになったとは思わないが、尊敬するようにはなつたと感じる。

4 夢（歴史を紡ぐ）とWillの庭

Willにとって、夢は歴史を紡ぐもので、「人生を不思議な形にパッチワークしていく。」(Dreams patch life together in strange patterns. 34) 買い物に行ったり、遊園地へ行ったり、潮干狩りをする夢も見ることが、曾祖父が工事の棟梁に話し方を教え、読み方を習ったことや、中国人は英語、シムシャン語、中国語がわかるが、英語を話すと中国語を忘れると言ってあまり話さなかったこと (55)、生命の危険にさらされて、動物のように働くだけ働かせられたことなど、詳細に渡って、夢で体験する。「良いインディアンとは死んだインディアンのことだ」(The only good Indian is a dead one was the rule of law then. 87) というのが当時の人の考え方であった。

ピースワークをしながら、このような差別のビジョンを見て、Willは「別の思い出には、別の庭。」(“Another memory. Another garden.” 56) などと、急に話し出し、周りの人をびっくりさせたが、皆はその手にある美しい花園 (Flower gardens) にさらに驚いた。夢に手伝われ、Willの手は然に動き出し、今まではSarahのボタンに合わせて作っていただけなのに、祖母を思わせる「思い出の庭」(memory garden) など独創的な美しいボタンを作り出していた。

暗い歴史の暗部を見ながら、手は美しい模様を編みあげていっていた。これは、成人式を機に、いじめに対処する姿勢を表明したのと同様に、Willの役割が、部族を過去から浄化、解放し、美しく花開く未来に向かう手助けをすべきことを暗示しているのであろう。それが、タイトル *Will's Garden* の示唆することだと筆者は考える。

成人式前夜、寝る前に、「Tonyがタバコをささげ、Willも同様にした。」(Tony drops some tobacco. George and I follow suit. 117) このようなケープができた感謝と明日への祈願を込めて。

5 人生の秘密：寄宿学校

女性が手仕事をしながらよく見る映画に *Joy Luck Club* がある。これはアメリカに渡り、*Joy Luck Club* を結成して、麻雀を楽しんできた中国人妻4人が心の奥底に封印してきた秘密の話である。Willにはそんな深刻な話は恐ろしく思える。

Intensity scares guys. It scares me. The one that scared me most was *Joy Luck Club*. That movie opens the door to the secret space of motherhood. It shows what you never

want to see as a man. ... Dad does not know anything more about Mom and her secrets than I do. (21-2)

男としては見たくないものである。そしてそれは、Willに母親の秘密に思いを馳せさせる。父親だって母の秘密を知らないだろうし、「秘密の扉を母親に開けてほしくないと祈る。」(I prayed my mom never opens the door to her secret spaces. 23)「男にも秘密はあるだろうけれど、*Joy Luck Club*ほど強烈なものではないだろうと思う。」(I guess guys have secrets too, not as serious as the ones in *Joy Luck Club*, but we have secrets. 35)そして、自分がいかに母親のことを知らないかに気が付く。

I don't really know this woman called my mother. ... I have no idea how she thinks or what she thinks. ... She is such a stranger to me. ... My father is simple, but how complex and mysterious is my mother. (74-6)

複雑で、神秘的な母親と比べて、父親は単純だと思う。こんなWillに母親の秘密の扉へ近づかせたのは、伯母Josieが語る「寄宿学校」(Residential school)⁽¹⁰⁾の話である。

寄宿学校では食べ物をほとんどもらえずに、15歳のころにJosieの手は関節炎でこぶだらけになってしまった。Josieの母親はその手を見て、もうJosieを学校にはやらなかった。しかし、Josieは学校の仲間が恋しくて、その後10年ぐらいは家族のすることを受身的にして、ただ過ごしていた。それを見た祖母に「自分の生活を生きなければ、心が死んでしまうよ」(You got to participate in your own life, or you will die inside... 153)と言われ、裁縫はできないけれど、料理をし、冗談を言って皆を楽しませ、人生を楽しめるようになった。「退屈なのは、自分が積極的に人生に関わっていない時だけだ」(The only time I was bored is when I didn't bother to participate in my life. 153)と言う。そのJosieに比べて、Willの母親は12年間も寄宿学校で過ごし、働き者ではあるが、楽しそうでない。

I had heard about the abuses, the beatings, the hunger and the rapes, but this made the whole thing a horror story. I know my pop never went, but Mom did, for twelve long years. ... A purple veil of understanding starts rising and the ice slivers in my blood melt. Mom works, like Great Grandma did, like a workhorse, but she rarely enjoys her life. (154)

Willは寄宿学校での虐待、殴打、飢餓、凌辱に関して聞いたことはあったけれど、Josieの話を聞いてそれは恐怖の現実味を帯びてきた。ただ、母親を理解する手掛かりのようなものがつかめた気がした。そして、Josieと話したことを自分から母親に告げる。そして、母親の寄宿学校での心に閉ざしてきた激しい怒りを知る。

I never thought I would have to talk about this. I was so angry in that place. Every day

I was angry. It wore me out. I just can't get mad over it anymore. ... I kept journals in there, hid them between the mattresses of my bed. I took them home every holiday, that someone sent for me... Josie and I talked all day about it as we dug out that daycare. By the end of the day I was furious again. I told Josie about the journals... They crippled her, and I couldn't get up the caring between us to feel that. ... I just couldn't feel for my own sister. No sewing, imagine a life with no sewing... I felt for her for the first time today. (159-60)

母親は、毎日怒りに満ちた生活を寄宿学校でしており、呼び戻してくれるように休暇で帰るたびに付けていた日記を持ち帰った。建設現場でJosieとその話をしていたら、またその時の怒りが蘇ってきた。今日初めて、不具にされた妹の気持ちに添えたとWillに語る。あまりの怒りでどうしたらいいかわからないから、考えてくれと言って、Willに日記を渡し、初めて心から妹を愛せるようになった機会を作ってくれたことに対して、母親はWillに感謝する。ここで、Willは、母親の笑顔の裏にある悲しみの理由がわかると同時に、母親の過去の重荷をSto:loh族の男として引き受けることになる。

Josieは理由は何であれ、学校へ戻りたかったのに戻されず、母親は家に帰りたかったのに、心の傷には祖母も気がつかずに、学校へ戻されていた。母親の心にずっとあったJosieへの恨みの感情も、同じように犠牲者であったJosieの思いを分かち合うことにより、溶けた。

この話の後、Willと母親が建設現場へ行ってみると、Josieは「自分の人生を楽しくする」(making her life interesting for herself 161) ために、みんなに声をかけて、笑わせていた。

ここで、寄宿学校に関する最近の動きに関して、一言補足しておく。今年の8月上旬に「寄宿学校同窓会」(Residential School Reunion)⁽¹¹⁾に参加する機会を得た。政府や旧寄宿学校との「寄宿学校補償合意」(Residential School Settlement Agreement)⁽¹²⁾が2006年に締結されたころから、このような運動がカナダで始まっている。出席してみて、筆者は、この集いの趣旨は、真実を明らかにし、自らと和解(reconciliation)することにより虐待の歴史を後にし、今後に目を向け前進していこうというものであると理解した。基調講演や体験談などがあったが、暗い過去に拘泥した話はなかった。癒しの儀式とともに、子供向けにピエロの手品や夜には先住民ロック・バンドに合わせての踊りなどがあり、非常に前向きな集いであった。この集会には、「ギクサン族寄宿学校生存者の会」(Gixsan Spirit Residential School Survivors)の生存者を含む「スピリット・ウォーク」(Spirit Walk)の人たち20名ほどが、寄宿学校生存者および家族の癒しと支援のためにヘーゼルトン(Hazelton)からリットン(Lytton)まで500キロを歩いて来、出席していた。

6 Sto:loh社会

WillはSto:loh社会について次のように語る。

We are clan-based, they are 'people' based. Democracy is about 'people' in general. ... Human rights versus family and Clan obligations... We don't have rights in this family.

The kids are permanently grounded. We don't go anywhere the family doesn't go. We busy ourselves with whatever the family is busy at and everyone...belongs to every house we set our feet in. We are ruled by maxims, beliefs everyone calls them, maxims is what they are: "We don't watch people work." This means if you see someone doing something you jump in and help them out. (45)

我々の社会は民主主義のように人に基づいているのではなく、部族に基づいている。個人の人権ではなく部族としての義務が優先し、家族と共に行動し、家族がすることに勤しみ、誰もが訪れた家の家族となる。人が働くのをただ見ているはいけないなどの格言に従って生活する。誰が何をするか役割を決めるといより、必要とされることを人が自然に手伝っているのを筆者も経験している。Witは自分がゲイであることをWillに打ち明けた時に、先住民社会に関して次のように述べる。

If folks want you to know something, then they offer to tell you of their own accord. If they don't offer, then they don't want you to know. So there is no way to ask something personal without being a nosy creep.

知ってほしいことがあれば、相手から話し出すので、質問する必要はない。先住民社会での学び方は、「よく聞き、観察する」(Listen and watch) ことである。筆者もわからないことがあっても、訊かずに、答えが見えてくるのを待てばいいことを早い時期に学んだ。

さて、Sto:loh社会の特性を考察し、それがWillに与える影響を検討したところで、次に、Willの成人式に関して検討してみる。

V Willの成人式

Sto:lohの男として、皆に認められる成人式当日の朝は、「朝の儀式」(Sunrise Ceremony)⁽¹³⁾と浄めの「スエット」(Sweat)⁽¹⁴⁾で始まる。「朝の儀式」は父親が執り行った。

Pop is out there doing Sunrise. ... He is singing his song to the sun. Mom is standing next to him with a copper water container. ... Pop talks to the sun about the changes in this family that are coming down the pipe. He is grateful for them, he is grateful for himself. Today I give my last son to the world. We join him as he sings and lays out his tobacco. (119-209)

母親は銅の水入れを持って父親の隣に立つ。WillやTonyもその隣に立つ。父親は、太陽に歌を捧げ、パイプを用いて家族が執り行う変革に関して語り、感謝を述べ、最後の息子を世に出すことを誓う。皆父親と一緒に歌い、タバコをささげる。

スエットでは、「笑い、歌い、泣き、話す。スエットで物事が解決され、進むべき道が明確に

なる」(We laugh, sing, cry and talk. Things got resolved in that Sweat for me. The road ahead is clear as a bell. 122) と Will は言う。スエットの後、Will は皆に上げる写真をフレームに入れ、石、カラスの羽、ワシの爪、杉の一枝を持ち、太陽、月、星の明かりを従え、心の準備をする。外でたかかれていた火の周りには、Will のために、シェーカーを持ち、一晚中歌ってくれた人たちがいた。

火のたかれたロング・ハウス (Longhouse) の中で、ドラムに合わせて、Will は、母親をはじめ、親戚の女性を一人一人順番に、男性はまとめて、称えて認め (acknowledge)、プレゼントをあげていく。特に、「自由、正しい選択、愛と喜びに向けて母のように導いてくれた Josie 伯母さん」(Aunt Josie mothered me in the direction of freedom, of choices, of love and joy. 124) には特別な思いが Will の胸を打つ。

この皆の前で「称え認める」(acknowledge) というのが先住民社会では非常に大切なことで、それはその人に勲章をあげるようなものである。また、式において、「称え認める」その気持ちを皆に「見てもらう」(witness) ことが、儀式の要である。文字ではなく、口承に頼ってきた先住民にとって、いろいろな節目に当たって、きちんと感謝を言語化し、皆と共有することが重要なだと筆者は考える。

そして、Will は、成人式での決意を皆に告げる。「みんなが、荷を軽くしてくれたようにこれからの世代の荷を軽くする。文化の守り手となって、慣習を行っていく。大地に煙草をささげて、環境科学者になることを誓う。」(125) さらに Will は続ける。

I want to learn our science first, to ground myself in the science of holy knowledge, then tailor their science to mine. I am going to struggle in an activist way to detoxify this earth, to make this world more responsive to her, to treat her as the beautiful, flexible, fragile and deserving woman she is. That's if I can alter the course of my personal history from the guy most likely to ask the dumbest question to the Sto:loh man who is the caretaker of this island. (125)

「科学を学び、科学の聖なる知識に基づき、それを先住民社会に合うように調整する。この地球を浄化し、この世を地球に相応しいものとし、地球を美しいがもろい、価値あるものとして扱うように積極的に働きかけていく。」そして、最後に「自明のことを聞く馬鹿者から、この島の守り手である Sto:loh の男性に自分がなればのことだが。」と付けくわえる。

この Will の決意表明の後、全ての贈り物が配られ、Will の歌が謡われ、饗宴の準備が整う。皆が、Will を祝福し、握手をするために並ぶ。

娘の場合にも初潮を迎えた後の成人式があるが、息子の場合には、いずれ新しい家族のもとへと離れていく者への特別な哀惜の念もあることであろう。この成人式の儀式を一区切りとして、Will は、Sto:loh 伝統、および、地球の守り手となる決意を持って生きることになる。

Will の夢に最初に出てきた「ワシの帰還」とその「半分以上の死」の意味であるが、地球環境破壊が進む中で、Will のようにその救い手として出てくる若者たちの道が非常に険しく、厳しいものであることを示唆しているのであろうと考える。先住民たちは、元来、食料に関し

では、必要なものだけ採取し、乱獲はせず、狩猟場やキャンプ場などは、場所を変えて設置し、環境を保全するようにずっと生きてきた。現在でも、200人ぐらいが4日以上もテントを張って生活する‘サンダンス’⁽¹⁵⁾などにおいても、儀式が終われば、どこでそれが行われたかわからないほどに、復元する。世界全体が結束して、努力していかなくては、多くのものが犬死にすることになる危機に曝らされているとMaracleは言いたいのであろう。

VI 終わりに

この作品はWillが盲腸破裂により入院し、生死の境をさまよい、何とか持ちこたえるところで終わる。病院では、家族の結束の再確認のみではなく、黒人看護婦の目を通した奴隷としての黒人の苦難、クリー族 (Cree) の強制移送にもWillの夢想は向く。アフリカなど他民族の苦闘は、詩集*Bent Box* (2000) などでもMaracleが扱ってきたテーマである。意識が戻ってから10日間入院してはならないとわかり、10日一人でいられる恵みを与えられたとWillは考える。「成人になって、これからは自分で決定をしなくてはいけないのだから、勉強しようと、寄宿学校、環境科学、自治、国家などの本を読む」(187) ことにする。

この作品には、啓蒙的な要素がちりばめられている。Willが環境科学者になりたいのだとLei-Laniに言うと、Lei-Laniは、科学や環境に関して先住民女性の描いた作品があるとWillに勧める。カナダを代表する先住民作家Jeannette Armstrongの*Whispering in Shadows* (2000) である。

A First Nations woman who wrote about the human genome project and other environmental things... She seems to know something about us and something about science. (126)

ArmstrongはMaracle同様、大きく分類すれば、Salish族に属しており、お互いに協力し合っており、先住民教育に携わっている。

また、Louieという司会者が成人式前の全体集会で出てくるが、それは、赤字だった部族を率いて、企業を興し、大きな業績をあげるところまで部族を発展させた先住民企業家として知られる首長の名前と同じである⁽¹⁶⁾。

このように、この作品は、青春文学として、Sto:loh伝統文化に深く根差した、母系を中心とする先住民社会の健全なよい面を強調した作品となっている。ただ、その分、先住民社会の伝統を知らないとわかりにくいところがたくさんあるが、それは、生き生きとした日常生活を浮き彫りにする効果ももたらしている。Willのように、伝統を守りつつ、時代を見据え、今後どのように地球を守っていったらいいのか模索、努力する若者が多く出てくることを祈りつつ、「縁あるもの全てに」(All my relations.) で、本稿を閉じる。

注

- (1) 本稿の作品からの引用部には、文法的に不正確なところ、間違っているところもあるが、

著作のままの引用である。Pigeon Englishとまではいかないが、一民族の英語の癖を反映している。ほとんどの先住民が、専門職に就いている人たちでさえ、同じ誤用をする。

- (2) 今までの著作に関しては、拙著「リー・マラクル：先住民作家としての道程— *Bobbi Lee, Indian Rebel* より *Ravensong* へ—」『カナダ文学研究』第9号（2002）に詳述。下記に年代順にMaracleの作品をあげておく。

1975年 *Bobbi Lee, Indian Rebel*. Toronto: Women's Press.

1988年 *I Am Woman: A Native Perspective on Sociology and Feminism*. Vancouver: Press Gang Publishers.

1990年 *Sojourner's Truth and Other Stories*. Vancouver: Press Gang Publisher.

1992年 *Sundogs*. Penticton: Theytus Books Ltd..

1993年 *Ravensong*. Vancouver: Press Gang Publishers, 1993.

1998年 "Where Love Winds Itself Around Desire." *First Fish & First People: Salmon Tales of the North Pacific Rm*. Seattle: University of Washington Press, pp.161-79.

2000年 *Bentbox*. Penticton: Theytus Books Ltd..

2002年 *Daughters are Forever*. Vancouver: Polestar.

2002年 *Will's Garden*. Penticton: Theytus Books Ltd..

- (3) *Daughters are Forever* に関しては拙稿「*Daughters are Forever*: 先住民の宇宙観と女性」『十文字学園女子短期大学部紀要』第39集（2008）参照。
- (4) この「集合記憶とでもいうようなもの」というのは、筆者の解釈である。
- (5) 正式にはパイプを使い、その煙が創造主に祈りを届けるとされているが、略式では、ルースタバコ（巻いていないタバコ）を手を持って感謝や祈りを捧げたり、許可を求めたりする。詳細は、拙稿「聖なるパイプとホワイトバッファロー・カーフ・ウーマンの“聖なる伝承”」『十文字学園女子短期大学部紀要』第31集（2000）参照。
- (6) 過去20年間「サンダンス」(Sundance)、「スエットロッジ」(Sweat Lodge)、「長老と若者の集い」(Elders & Youths' Gathering)、「命名式」(Name-Giving Ceremony)、「ギザアウェイ」(Give-away)、「寄宿学校生存者の同窓会」(Residential Survivors Reunion)などに、準備の段階から何度も参加している。儀式の詳細に関しては、拙稿「ニスガ民族 (Nisga'a Nation) 原則合意 (AIP) 調印の背景」『十文字学園女子短期大学部紀要』第28集（1997）、「現代に生きる北米インディアンのスエット・ロッジ」『十文字学園女子短期大学部紀要』第29集（1998）参照。
- (7) Give-awayに関しては、拙稿「ニスガ民族 (Nisga'a Nation) 原則合意 (AIP) 調印の背景」参照。
- (8) 伝統的儀式におき、アルコール、薬物は禁止されており、伝統的生き方 (Red Road) をする人たちは飲酒する人たちではない。
- (9) *Voices from Four Directions*: 86-7参照。
- (10) 寄宿学校の詳細に関しては、拙稿「カナダ先住民への同化教育: 寄宿学校制度」『十文字学園女子短期大学部紀要』第27集（1996）参照。

- (11) 「寄宿学校生存者の同窓会」はBC州Lyttonで8月1日から3日まで開催された。生存者は50名ほど、その家族や支援者などを入れて、150名ぐらいの者が参加した。8月7日から9日には近くのKamloopsでも同様の集会が開催された。
- (12) 「寄宿学校補償合意」草案が、2005年5月に出され、2006年5月に連邦政府により承認された。Common Experience Paymentとして、寄宿学校生存者全員に初年度は10,000ドル、その後1年加算されるごとに3000ドルが支払われ、その他いろいろな障害に関しては別途査定される。また、癒しを支援するための基金125,000,000ドル (Aboriginal Healing Foundation) を設置することなどが決められた。(United Church of CanadaのWeb.サイトより)
- (13) 多くの先住民は、朝起きた時、Sunrise Ceremonyを行う。まず最初に太陽に向かい感謝と祈りをタバコや水を用いて、ささげる。
- (14) スエットロッジに関しては、拙稿「現代に生きる北米インディアンのスエット・ロッジ」参照。
- (15) Sun Danceは先住民の儀式の中でも一番重要な聖なる儀式だと考えられている。前後の4日も含めれば12日間設営する。筆者も踊り手として、6回、ヘルパーとして2回参加したことがある。「バッファロー・カーフ・ウーマン」参照。
- (16) BC州South OkanaganのOsoyoos族のChief Clarence Louieは、24歳で借金にあえぐ部族の首長となり、ブドウ畑、ワイナリー、建設会社、ゴルフ場、ツーリスト・リゾートなど10に及ぶ企業を立ち上げ、雇用を創出した。47歳の現在、経済発展により部族全体の生活レベルを上げた成功例として、白人社会にも認められている (Diotte, Kerry およびCBC National Newsなどより)

参考文献

- Armstrong, Jeannette. *Whispering in Shadows*. Penticton: Theytus Books Ltd., 2000.
- Bierwert, Crisca. *Brushed by Cedar, Living by the River: Coast Salish Figures of Power*. Tucson: University of Arizona Press, 1999.
- Diotte, Kerry. "As I See It." Vancouver Sun, Aug.18, 2009.
- CBC National News, Feb. 7, 2007.
- Lee, Maracle. *Ravensong*. Vancouver: Press Gang Publishers, 1993.
- Bent Box*. Penticton: Theytus Books Ltd., 2000.
- Daughters are Forever*. Vancouver: Polestar, 2002.
- Will's Garden*. Penticton: Theytus Books Ltd., 2002.
- Swann, Brian, ed.. *Voices from Four Directions: Contemporary Translations of the Native Literature of North America*. Lincoln: University of Nebraska, 2004.
- United Church of Canada. "Residential School Settlement Agreement." Web.
- Wang, Wayne. *Joy Luck Club* (film.) Oliver Stone Production.